

編集室から

早いもので岳父が亡くなって一年が経とうとしています。難病に冒され徐々に弱っていくその姿は今でも脳裏に焼きついています。

その日、私たち家族は何か予感がしたのか、予定を繰り上げて稲刈りを強行。去年の九月上旬は天候にも恵まれて比較的スムーズに稲刈りができました。

全て終えた夜半に他界。母・妻・二人の娘と女性に囲まれて暮らしていた岳父らしく、最期も孫娘も含めて全ての女性陣に囲まれて逝きました。

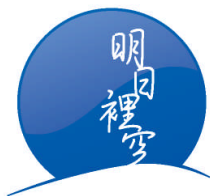
今年は昨年と打って変わって稲刈りを目前に控えたこの時期に雨が続いています。田んぼが雨でぬかるむとコンバインはおろか、バインダーも入らず手刈りになります。機械刈りの十数倍の手間と労力が掛かるといわれています。そんな頭数と時間をかき集められるはずもなくひたすらお天道さまを拝むしかありません。

「自然と共生・環境に優しい」などという言葉が飛び交っていますが、それらの言葉さえも傲慢なのではないかと感じるときがあります。

科学者として揺ぎ無い方ほど謙虚な姿勢を貫いておられます。自然は人間の英知などを遥かに超えた存在です。小さな至らぬ頭で考えた数々の技術も、本質的に考えると残念ながら小手先の対処療法に過ぎません。どんなに逆立ちをしても太陽の代わりは創れませんし、台風の進路を変えたり、ゲリラ豪雨を消滅させるどころか予測することさえできないレベルに現在の人間は在ります。

船外機・バイクという最小限の文明の利器は使いながらも、漁や山仕事という自然相手に「生きる」という原点から離れなかった岳父が遺した梅や柚子も自然に育っています。

毎年、稲穂が黄金に垂れ、刈り取る時期になると岳父の事を思い出すのでしょうか。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2014/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2014/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

長 月



世界農業遺産登録
能登半島にて
by hama

社員研修の導入にB・絵手紙(ビジネス版の絵手紙)が、却下されました。「人材育成は、芸術や情緒とは縁がないよ。緊張の教育環境にそぐわない」と、というのが主な理由でした。

B・絵手紙は、本当に人材育成に効き目がないのでしょうか? そもそも絵手紙は、ヴィジュアルで語りかけ、人と人の交流を円滑に、促進する効果があります。B・絵手紙は、ジョブ・コミュニケーションのツール・キットです。視野が狭いのも困りものと憤慨しました。しかし、却下されているばかりでは、B・絵手紙は普及しません。人材育成へ貢献が消滅し、臨めなくなりません。相手を攻めるのは、間違っていました。

B・絵手紙は人材育成に効くと、研修プログラムを実践している側の、得意げな奢りがありました。普及・広報などアピール活動を、怠っていました。いや、独りよがり、まったくもって説明不足でした。

そんな反省から、自費出版ですが『招来!ビジネスライフを豊かに』B・絵手紙があなたのコミュニケーションをうまくさせる』を、発刊しました。著者の社員研修実践から、B・絵手紙の自作品満載と、ビジネス交流のエッセイで構成しています。それと、社員研修を受講されたビジネス・パーソン(某企業内の社員)の実習風景や感想文なども掲載しています。拙著は、ジョブ・コミュニケーション事例集の画本といっても過言ではありません。

セールスで活用している絵手紙は、実績があります。

が、著書は、職場のコミュニケーション講座テキスト用として、編集されました。社員がビジネスで、もっとも苦手な上司と部下との人間関係構築や、職場の活性化など、楽しめる講座本が特徴です。

とはいももの、マネジメントには効果的なテクニックなどないことを承知しています。素人が、アトに美しく描いてもつまらない。B・絵手紙は“ヘタでいい”と逆転の発想だからおもしろい。B・絵手紙のヘタなライティングは、モチーフをよく観察、相手を思い文章を綴ります。いいかどうか迷い投函するなど、一連の動作があります。まさに、「集中力」「思考力」「判断力」など、マネジメントの中核的な能力向上を、秘めています。

一生懸命にライティングされた絵がある手紙は、ビジネスの相手に感動を届けます。大切な人との橋渡しとなり、相手の長く記録に、形で留まるビジネス交流が使命感です。詳細な説明は、当方のホームページで公開しています。

著書に興味・関心がある方、嗅覚が鋭い方は、お問い合わせください。定価二千円+税のところ、税込千八百円で送料は当方が負担します。是非ともお問い合わせください。恐縮ですが、B・絵手紙の就航と普及にご協力いただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。



【プロフィール】
かわぐち せい(日本能率協会マネジメントセンター(JMAM)パートナー・コンサルタント、日本絵手紙協会公認講師。階層別・目的別社員研修講師。

電話 : 090-2531-1615
Mail : zion21@topaz.ocn.ne.jp
HP : http://zion-sei.com/

濱のつばやき 『目標と制限』

「制限」と聞いて何をイメージするだろうか。決められた枠、不自由、苦痛、苦惱、理不尽…。つまりはマイナスの事柄が多いのではないか。

では、「目標」だどどつなるだろうか。夢・未来、目指すもの・まこと…。こちらはプラスのイメージになるのではないか。

この二つの言葉をつなげた例文としては、現状の制限を突破して、目標を勝ち取る」といった用法になるのが「普通」の考え方になるだろう。

ところが、ある勉強会で驚くべきことを耳にした。曰く「目標、それ自体も新たな制限となる…」にわかには理解し難い言葉だ。それは我々が如何に「世間の常識」なるものに囚われて物事を考えているかに由来するからだ。

我々は、目標は前向きに進化するために決められるもの」に対し「制限は組織・社会などから与えられる変えようのないもの」という先入観を疑う余地の無い常識として持っている。ここに落とし穴がある。

「今月の売上はこんなものかな」と目標を設定してしまつと、その目標を上回る業績は端から上がらない。目標自体が上限となつてしまつからだ。

目標=上限となつた瞬間、目標=制限と化している。これは大いなる自己矛盾であり、パラドクス(逆説)でもある。目指すべき一里塚のはずの目標が、それ自体があるが故に、いつしか目標=上限となり、それを遙か

に上回る状況自体の現実化を妨げてしまつ。

オリンピック選手に対する事前のインタビューをつぶさに聞いていると、面白い傾向が有る。「メダルを狙う」という選手は入賞止まり。「入賞を狙う」といった選手は、八位以内には至らずに終わることが多い。

では金メダルを取る選手は何と言っていたのか。

曰く「自己ベストを尽くす(更新する)だけだ」…。

ここにも秘密がある。メダルも入賞も数値的な目標である。自己ベストもタイム・点数として表現されるものがある。しかし、前者には暗に上限としての性質が含まれた目標となつているのに対し、後者は「自己を越える」という目標自体には上限としての性質が無い。

人間の脳は相当に保守的であるというのが最新の脳科学での定説だ。これは生命を維持するために本能的に過去の成功体験を引用し、その延長線に判断・行動をとることで生存確率を上げようとしているという理由(過去の経験則)らしい。つまり保守的な脳の判断のままに生きていると、「過去に生きている」と本質的には同じ事になる。

「今(現状)を変えたい」から目標を設定する。にも関わらずその目標自体が卒の無い上限値として無意識に決められていたとしたら…。結果は必ず卒の無いもの(保守的領域)となり、それを越える華々しいもの(革新的領域)となるはずが無い。

本気の目標や願いを立てる際、その目標自体に上限としての性質が含まれて居ないか、よくよく意識して吟味することが必要なかもしれない。

瀕死の当社をドライブしたのは我々経営陣だが、それをリーガル面からバックアップしたのは弁護士集団、ファイナンス面からコントロールしたのは白いフェラーリ。そして、この両者をキャスティングしたのが、若きファンドマネージャーである。他の資金調達やスポンサー選定においても、アレンジャーとして当社に深く関与した。彼は日本人だが横文字を必要以上に駆使する。「ジャストアイデアですが...」。「イグジットのオプションを...」。「このディールは...」。西日本の某政令指定都市生まれ、京都大学理学部で数学を専攻し、名の通った投資ファンド会社にてその辣腕を振るっていた。

類まれな才能と、てっぺんの方でしか味わえない経験。一回り年下の彼は、若くしてその両方を手に入れており、会社再建に向けた難問を次々と解いていく。スキルの高さに加え、スマートな振る舞いにスマイルも完璧。血の通ったファンドマネージャーは、妬けるぐらいに輝いて見えた。

当社が会社再建を果たしてすぐ、別の投資ファンド会社のアセットマネージャー¹へとキャリアアップする。彼は間違いなく、魑魅魍魎渦巻く資本主義のド真ん中を闊歩していた。とことん上り詰めて欲しかった。

ところがそれから5年が経過した2012年4月、彼は東京を去るという決断を下す。郷里に戻り、官が出資する投資ファンド会社のマネージャーという道を選んだのだ。意外だった。いろいろ想像する。疲れたのか、それとも愛想を尽かしたのか、あるいは弾かれたのか。その前月、日本を代表するビルの6階で、ささやかなる送別会が開かれ、私生活がまるでイメージできない女弁護士、逃げない新社長、総務部スタッフ、そして私が駆けつけた。

昔話はあまりしなかった。私は失礼にも「都落ち」という言葉を投げかけた。私にその言葉をかけてくる人は誰もいないことを考えると、私は相当の非常識だ。彼は相変わらず横文字を使いながら、否定も肯定もせず淡々と話を続けた。腑に落ちる答えを私は聞けなかったが、いろいろ悩んだ末の結論であり未練はないように感じた。

当社との関わりが彼のこの決定に影響したことはないだろう。我々との経験はかなりインパクトのあるものだったと話してくれたが、それ以上の修羅場を、彼はその後幾度となく潜ってきたに違いない。ただ、当社のイグジットやディールにアイデアに富むオプションをぶつけてきたギラギラとした姿を、この時はあまり感じる事ができなかった。もともとのスマートさがちょっと人間臭くなったような、そして、もともと冷徹な印象はなかったがそれが一層穏やかで温かみのある雰囲気。

お土産の水ようかんを渡す。別れの握手はちょっとだけブルツときた。どこで何をしようと、彼は私の永遠のアイドルなのかもしれない。

1：様々な資産の管理・運用を行う職種

朝から夜まで働いている身としては、テレビをあまり見る機会がないのですが(実は相当なテレビっ子なのに)、朝のわずかな時間に流れている8時台のワイドショーでは「広島土砂災害事件」がここ数日の話題です。自然との関係性を改めて考えさせられるものでした。あと昨今で言えば「長崎の女子高校生による同級生の殺人および遺体解体の事件」、「裏サイトで女子高生殺人請負いの事件」といったこれから娘の子育てをしていく親の一人としては不安を禁じえない事件であったり「やはり質が低かった地方議員の公僕性」(うちの地元を見れば当たり前ですが)、そして何ら興味すら抱かない芸能人のスキャンダル等々ネタには毎日事欠かないようです。本当に毎日それだけ事件が起きるものだと、ある種関心すらしてしまいます。

そんなワイドショーに、そのクール(三カ月)に各局が押すドラマに登場する女優・俳優陣たちがよく登場します。「なるほどHEROが13年ぶりの復活か。8局は困った時のムタク頼み。しかし相変わらず若いすなあ。ちなみに同い年です。」「6局は日曜の半沢梓でおやじの背中か。うーん、最近親父と話してないな。」「5局はまだ相棒やらないんだ。待ち遠しいよー。」と勝手な解説をしているなか、この7月~9月梓で気になったのが“大人の恋愛(不倫)”をテーマにしたドラマが目につくことです。ひとつは、同窓会で再会した四十路近い同級生たちが登場人物の、まあ巷でもよく聞く妄想物語です。ふたつめが、非常にエッジが利いているというか、恐ろしいほどの現実性がありそうな「昼顔」というドラマです。「昼顔」とは、人妻が昼の限られた時間に他人の男性に見せる顔ということで、旦那は仕事、子供は学校に行っている間にどこかの男性と密会しちゃっています!という内容です。とても家族団欒で食卓を囲んで観れるようなドラマではありません。非常に気まずい雰囲気になる家庭も少なくないでしょう(笑)。

それ以前にも家族をテーマにしたドラマでも、このような描写があったものがありますが、それは家族というものを考えていくにあたってのエッセンスのひとつという扱われ方でした。

“テレビ離れ”という言葉聞いて久しいですが、それでも多大な影響力を持つテレビというメディアが果たすべき役割は何でしょうか?仮に「ある特定のテーマを取り上げ、多様な切り口から検証し、視聴者に事実を伝えるとともに、原因となる仮説の推論を提唱する」という事であるとすれば、私は離婚率が急上昇している昨今において、このテーマを深くつきつめていくというのは賛成です。しかし、視聴率のみが判断材料となるテレビドラマの世界では、美しい女性と男性が織りなす単なる恋愛模様で終わるようでは、単に世の中を煽動しているとしか思えません。影響力を持つメディアだからこそ、「その局としての道德観」が問われるのだと思います。

個人的には「半沢直樹」、「ルーズヴェルト・ゲーム」のように皆心を熱くしたようなこれからの日本、そして自分に希望が持てるドラマを作ってくれないかなあ!あとうちのHDDにこのドラマが録画予約されていないことを願います。

『富士の国から ~大魔神のたび~』インターンシップ生受入れのお話 静岡県小山町経済建設部専門監 溝口 久

5日ぶりに静かな夜を迎えている。小山町では今年初めてインターンシップ生5名を受け入れることにした。その内3名は町内に実家がないから、寝泊まりするところも用意しなくてはならない。無謀にも我が家“六号山荘”を宿舎に提供することとした。かつてお世話になった県庁OBで現在、常葉大学に勤務されている方からのお願いだ。町長にとっても県議時代からの知り合いということもあって、二つ返事で受けることにした。常葉大学法律学科の2年生4人に、直接役場に申し出のあった関東学院大学法学部3年生の1名を加え5名が、8月18日から22日の5日間にインターンシップに臨むことになった。まずはプログラムを組まなくてはならない。5人に同時に同じ部署で仕事をさせるには体験の度合いが薄くなるし、指導する職員の負担にもなる。3つのグループに分け、日程も午前、午後割り振ることにした。小生が関係している部局に依頼したところ町長戦略課、商工観光課、農林課、こども育成課が協力してくれることになった。特に、農林課の瀬戸君は常葉大学卒ということもあって、細かなプログラムを用意してくれた。町長戦略課では、若手職員や区長を対象としたファシリテーション研修と一緒に受講できるようにしてくれた。研修後のふりかえりでは5人が皆、これからの行動に活かしたいと言った。

この時期、東富士演習場では自衛隊が実弾で行う総合火力演習がある、これを見せてあげたいと担当が言ってくれ、プログラムの内容は次々に決まった。

初日は町長の歓迎の挨拶から町長戦略課長の町政の説明、若手職員による庁舎内の案内、観光協会事務局長が自らハンドルを握っての町内案内と続いた。

戻ってきての“ふりかえり”は感想、こうしたらいいについて書き出し、発表という形をとった。皆口々に「富士山を抱えた緑、水が豊富の豊かな自然を褒めた。でも、あまり知られてないのでは」と、そのPR不足を指摘した。“おやまちょう”なんだけど、よく“こやまちょう”と言われることが、そのことを物語っている。

初日の研修を終え、我が家“六合山荘”にチェックインの3人を案内した。小生が一人で住んでいるだけなので、世話は自分がしなければならない。布団は用意できている。訳のわからない虫が室内に出没するから、殺虫剤。エアコンはないから、自然に近い風を送るパミュダの扇風機を用意した。食材は町長の奥さんが家庭菜園の野菜、素麺、果物、ゼリーを提供してくれた。風呂は町の富士山を一望する足柄温泉に毎日案内することにした。せっかく小山町に来たんだから、夜は歓迎会を開こうではないか、ホスト役は役場の20代職員だ。バーベキューは仕事上のパートナーのNPOふじさんスポーツコミッションの酒井さんが腕を振るってくれた。炭は地元の建築屋さんからの提供だ。町長も乾杯に加わり、学生を囲んでの会話は弾んだ。空を見上



げれば星が輝き、初日が無事過ぎていった。

2日目は3グループに分かれ、市民活動ヒアリング、猟友会申請書類の確認と整理、教育関係のアンケート調査集計の仕事に就いた。午後からは翌日のファシリテーター研修会の準備とこれまでの研修内容を受講した。

3日目は協働のまちづくりを進める欠かせない対話をスムーズに進めるに必要とされるスキルであるファシリテーション技術を身に付ける研修会だ。会議をデザインする、アイスブレイクから始まる意見を出しやすい環境づくり、“話す会議”から“書く会議”へ、合意の仕方というのが、ファシリテーションの技術のキーポイントだ。若手職員らに交じってのワークショップを中心とした研修に、学生らは大いに満足した様子だった。

四日目はここでしか見られない「陸上自衛隊富士学校」が毎年この時期に行っている「富士総合火力演習」の見学だ。陸上・海上・航空自衛隊が火砲、ミサイルを使っての度肝を抜く演習が、東富士演習場で繰り広げられる。最新鋭戦車、戦闘ヘリ、迫撃砲、輸送ヘリから出てくる偵察用オートパイなど次々と「日本を守る力」が登場する。これを見物に全国各地から何万もの人がこの地に集まる。

午後からはコミュニティバスのPR資料作り、林道管理委託業務の現地検査立会い、富士登山パークアンドライドシステムのアンケートデータ入力などの仕事待ち受けていた。

インターンシップ最後の晩、手打ちそばを打って締め会をすることにした。町長戦略課長がそばを打つことになったが、冷蔵庫に入れておいたそば粉を出してすぐに作業に入ったのが間違いだった。冷えきった蕎麦粉は空気中の水分を思い切り吸い込み、それに通常必要な水を加えたため、ふにゃふにゃになり蕎麦がまとまらず、ひどい目にあうことになった。硬めの蕎麦玉を別に作り合体させる形で、なんとかそば切り作業にもっていった。

学生は手打ちの蕎麦に皆大喜びであったが、でもホンマにうまい蕎麦を食べさせてあげたかったなあ。

最終日、副町長から修了証を手渡され、皆それぞれが感想を述べた。特にファシリテーション技術の研修が印象的だったようで、ゼミやサークル活動など皆で検討する場面で活用したいという声が多かった。

皆様、お疲れ様。「公務員よ！席を立てて町に出よう、そこには普通みんなが待っている。」机上だけでなく現場を特に重視した公務員を目指してほしいものだ。

スマホにラインのメールが入った「Qさん、インターンシップを終えて名残惜しいのでは？」と、とんでもない。完全燃焼で、全然名残惜しくないです。」

(おしまい)

